

※ ①は先端V字形の工具によると考えたが（大谷2012），平刃の工具を用いて一本の銀線の左右に別々に刻みを入れている可能性もある¹⁾。

写真1 柄間の銀線巻の刻み目の種類

4. 考察とまとめ

この銀装大刀（以下、上塩治32支群刀と呼ぶ）の特徴とその位置づけについては、以前にその外装の特徴から銀装圭頭大刀と考え、その変遷の末期に位置づける案を示した（大谷1999②）。その後、銀装圭頭大刀についても若干の新しい知見を得たので、それらを加えて、再論しておきたい。

（1）上塩治32支群刀は銀装圭頭大刀か

前稿でこの大刀を銀装圭頭大刀と考えたのは、鐔、鍔、鞘口、吊金具などが銀張りであるという技法と装具の様式、さらに法量が銀装圭頭大刀に多く見られるものだからである。こうした中で、上塩治32支群刀が他と異なる最も大きな特徴は、柄間に2列に刻みを打った銀板を被せている点にある。金銀装大刀では、柄間に銀線を巻くものが多いが、その銀線にはタガネによって刻みが施される。その刻みには銀線の形状、工具の形状によっていくつかの種類がある（写真1）。銀装圭頭大刀には、断面三角形の銀線に先端V字形のタガネで刻みを施したもののが特徴的に見られる（同①・②）。上塩治32支

群刀の柄間の銀板の2列の刻みは、通常の銀線巻きを模倣したものではなく、まさに銀装圭頭大刀の銀線巻きを模倣・簡略化したものと評価することができる。この点からも、上塩治32支群刀の柄頭が圭頭であった可能性が高い。

（2）大刀の時期

銀装圭頭大刀は、伴出する須恵器から考えて、T K 43型式新相～T K 209型式前半（飛鳥1期）の比較的短期間のうちに連続的に制作されたものと考えられる。これらをA～Fの属性の変化に注目して、並べたものが図6である。

A 柄頭の懸通孔金具

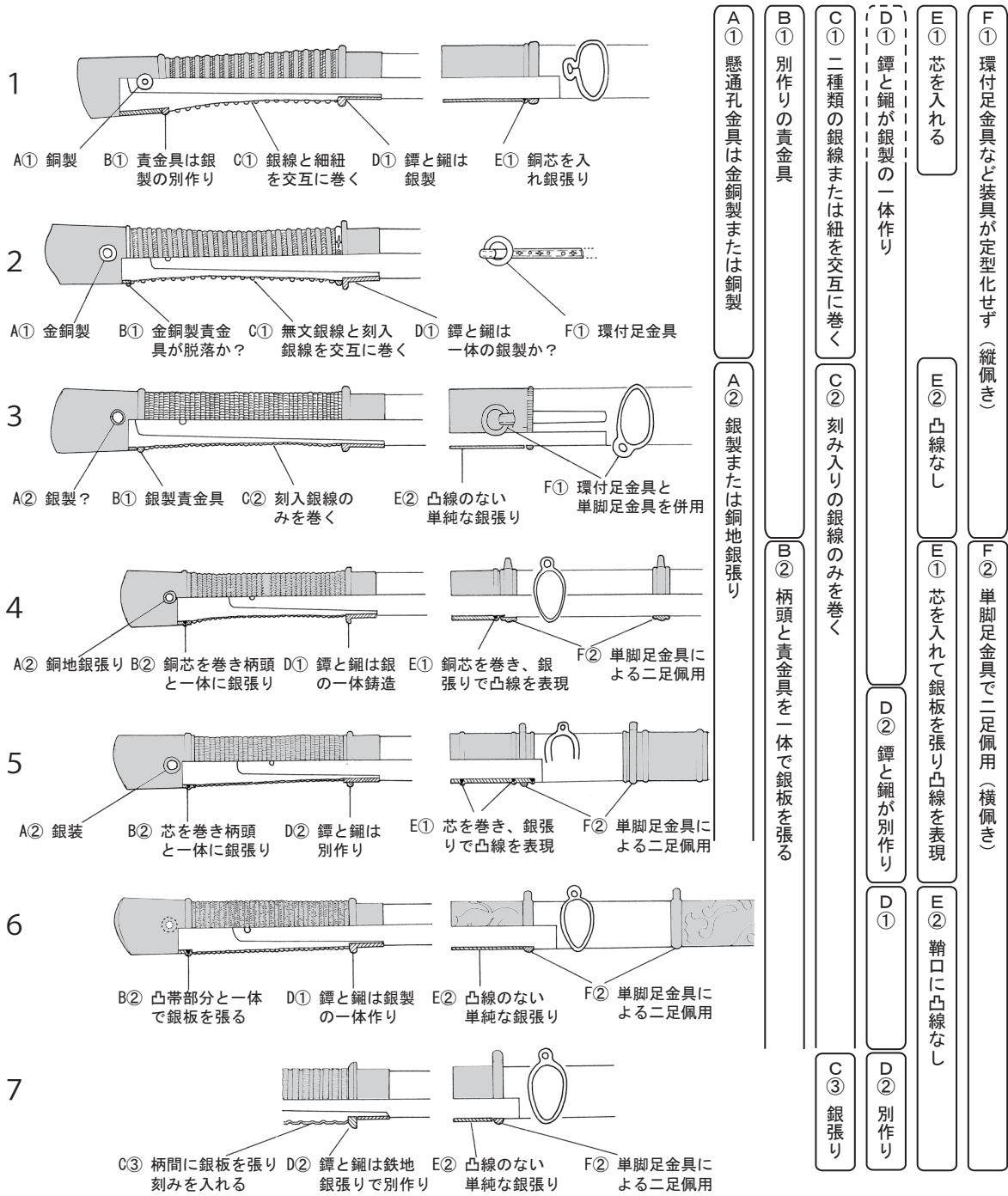
金銅製や銅製から、銀製または銅地銀張り製など銀装へと変化する。

B 柄頭端部の責金具

柄頭と別つくりのものから、柄頭端部に銅線などを巻き、柄頭と一体に銀板を張るものに変化する。

C 柄間

細い紐や刻みのない銀線と刻み入りの銀線を交互に巻くものから、刻み入りの銀線のみを巻くものへ、さらに柄間全体に銀板を張るものへ。



図中のA①～F②は、右側の変遷の指標の英数字に対応する。

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1 群馬県八幡觀音塚古墳（高崎市教委1992） | 5 島根県鳥木横穴墓（内山・大谷1995） |
| 2 千葉県金鈴塚古墳（酒巻2007） | 6 神奈川県秦野二子塚古墳（霜出編2013） |
| 3 埼玉県小見真觀寺古墳（瀧瀬1984） | 7 島根県上塩治横穴墓群32支群 |
| 4 京都府湯舟坂2号墳（奥村編1983） | |

図6 銀装圭頭大刀の類例と変遷（図は各文献より作成した）

D 鐔と鍔

両者を銀で一体に作るものから、鉄地銀張りで別々に作るものへ。

E 鞘口金具

銅線を芯にして銀板を張り、凸線を表現するものから、これの無いものへ。

F 足金具

環付足金具を用いた縦佩きから、単脚足金具による二足佩用、横佩きにするものへ。

各属性の変化は、必ずしもすべてが整合的に変化してはいない。また、細部の構造も肉眼観察では判断が難しい点もあり、今後一部を修正することもあるだろう²。それでも、大まかな変化の方向としては、おおむね妥当だと考える。編年というほど、型式を設定した明確な区分は難しいが、小見真觀寺刀までの柄間や佩用装置などが定型化しない前半段階（瀧瀬Ⅰ類に相当）（瀧瀬1992）と、湯舟坂刀以後の全体が銀装となり、単脚足金具2個を用いた二足佩用に定型化する後半段階（瀧瀬Ⅱ類に相当）の2段階に分けることができるだろう。

前半段階の八幡觀音塚刀は、前稿（大谷1992②）では金鈴塚刀の次に位置づけたが、今回は最古型式とした。八幡觀音塚刀（高崎市教育委員会1992）は、刀身の茎が柄頭の懸通孔によって留められている点や、佩用装置に他に類例のない環付金具を用いている点など特異なものであり、他の銀装圭頭大刀と同じ変化の流れの中に位置づけることはできないかもしれない。

後半段階の単脚足金具を用いた二足佩用化は、倭製品の金銅装の双龍・頭椎・圭頭・円頭大刀の変化に共通しており、後半段階の銀装圭頭大刀は倭製品であると考えられる。

上塩治32支群刀は、鉄地の鐔と鍔に別々に銀板を張っており、単脚足金具をもち、鞘口金具には凸線がない。こうした点から、上塩治32支群刀は銀装圭頭大刀の中でも最末期のものである。この大刀が出土したと考えられる上塩治32

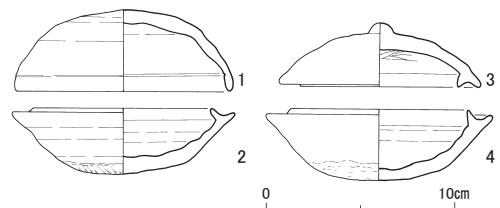


図7 上塩治32支群6号横穴墓出土須恵器（1/4）
近藤正原図

支群6号横穴墓からは、飛鳥1期の須恵器が出土しております（図7-1・2），大刀による編年観とも矛盾しない。

（3）柄間に銀板を被せる大刀

柄間に金銅板で包む大刀は、双龍環頭・頭椎・円頭・圭頭などTK209期以降の金銅装大刀では一般的である。柄間に銀板で包む大刀は、5世紀～6世紀後半の三葉環頭大刀に類例が多く、慶州皇南大塚南墳例、羅州新村里9号墳例、奈良県珠城山1号墳例などがある。これに対して、他の形式の大刀では稀であり、倭系大刀の奈良県藤ノ木古墳例（大刀1・4・5）、獅噭環頭大刀の島根県御崎山古墳例、羅州伏岩里3号墳例くらいである。

作り方は、三葉環頭大刀は、銀板の裏側から鱗文・唐草文を打ち出したものを巻き、鉢または鎌形の釘で留める（梅本2012）。藤ノ木古墳大刀1・4は、刻みをいれた銅線を巻き、その上に銀板を被せている（勝部・鈴木1998）。御崎山古墳例では、柄木に竜文を彫刻した後、銀板を被せて圧着させて文様を浮き出させている（町田1976）。

上塩治32支群刀は、柄木に区画の凹線を刻み、銀板を被せた後に刻みを打ったものと考えた。これは、先の3種の作り方のいずれとも異なり、時期的にも後出する。銀装圭頭大刀の秦野二子塚古墳（霜出編2013）では、鞘口や鞘間に木彫銀張り技法による唐草文が施されており、こうした手法を柄間に応用したものと評価したい。

【註】

¹ 鈴木勉氏の御教示による。

² 例えば、鐔と鍔の作り方については、湯舟坂刀は銀製の一体鋳造（町田1987）との指摘があり、金鈴塚刀や秦野二子塚刀も同様の可能性がある。これは鐔と鍔に錆による破損がほとんどないため、鉄地や銅地ではないと判断した。しかし、これは理化学的な分析によるものではないため、今後の精査が必要である。

謝辞

今回の報告資料と関連資料の調査にあたって、下記の機関の協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

出雲弥生の森博物館、掛川市教育委員会、島根県古代文化センター、玉村町教育委員会、秦野市教育委員会、早稲田大学會津八一記念博物館

参考文献

- 梅本康広 2012 「葛城・伝笛吹古墳群付近出土の装飾大刀～新羅式環頭大刀の展開～」『龍谷大学考古学論集Ⅱ - 綱干善教先生追悼論文集 -』龍谷大学考古学論集刊行会
- 大谷晃二 1999 ①「第2節 武器・武具」『上塩冶築山古墳の研究』 島根県古代文化センター
- 大谷晃二 1999 ②「第3節 上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』 島根県古代文化センター
- 大谷晃二 2012 「金鈴塚古墳の金銀装大刀はどこで作られたか？」『特別企画展 金鈴塚古墳展－甦る東国古墳文化の至宝－』木更津市郷土博物館金のすず
- 奥村清一編 1983 『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
- 内山敏行・大谷晃二 1995 「安来市鳥木横穴墓について」『八雲立つ風土記の丘』No.131 島根県立八雲立つ風土記の丘
- 門脇俊彦 1980 「上塩冶横穴群」『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』 島根県教育委員会
- 勝部明生・鈴木 勉 1998 『古代の技—藤ノ木古墳の馬具は語る—』吉川弘文館
- 酒巻忠史 2007 『木更津市文化財調査集報12 金鈴塚古墳出土遺物の再整理2—大刀の実測—』木更津市教育委員会
- 高崎市教育委員会 1992 『観音塚古墳調査報告書』
- 霜出俊浩編 2013 『秦野の遺跡5 神奈川県指定史跡二子塚古墳』 秦野市教育委員会
- 瀧瀬芳之 1984 「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 瀧瀬芳之 1992 「大刀と刀子」『観音塚古墳調査報告書』高崎市教育委員会
- 町田 章 1976 「環頭の系譜」『研究論集』Ⅲ 奈良国立文化財研究所
- 町田 章 1987 「戊辰年銘大刀」『箕谷古墳群』八鹿町教育委員会
- 山本 清 1984 「横穴被葬者の地位をめぐって」『島根考古学会誌』第1集 島根考古学会

写真1は、すべて大谷が撮影した。資料の所蔵機関は次のとおり。

①木更津市教育委員会、②秦野市教育委員会、③出雲市教育委員会、④掛川市教育委員会、⑤早稲田大学會津八一記念博物館、⑥玉村町教育委員会



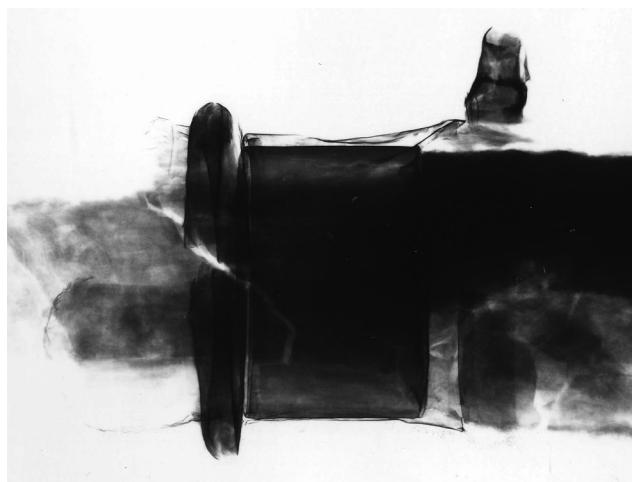
① 単脚足金具（一の足金具）



② 鞘口金具・鐔（棟側）



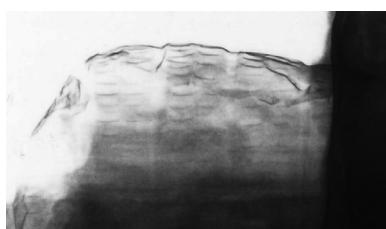
③ 鞘口金具・鐔（柄側から見る）



④ 鐔・鞘口のX線写真



⑤ 鐔（柄側）



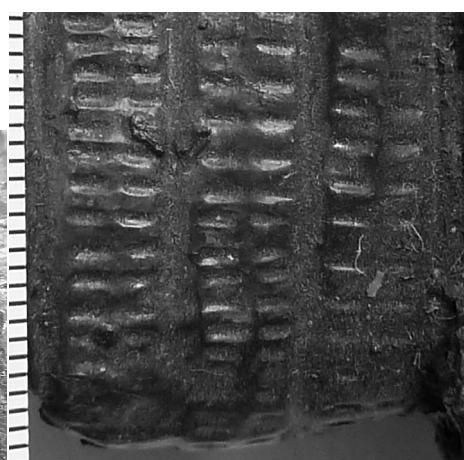
⑦ 柄間の銀板のX線写真



⑥ 鐔（鞘口側）



⑧ 柄間の銀板



⑨ 柄間の銀板（目盛 0.5 mm）

写真2 上塩冶横穴墓群32支群出土の銀装大刀

山代郷南新造院跡（四王寺跡）再考

花谷 浩

1. はじめに

筆者は先に、松江市山代町にある山代郷南新造院跡（四王寺跡）と出雲市東林木町にある大寺谷遺跡の同范軒丸瓦を主題にして、その軒丸瓦（南新造院跡Ⅱ類軒丸瓦）およびそれと組み合う軒平瓦（同Ⅱ類軒平瓦）の年代を論じつつ、同范関係が成立した背景についても憶説を述べた（花谷・高屋2012）。

この論考をまとめたる過程であらためて感じたのは、出雲地域の古代寺院研究が『出雲国風土記』の「新造院探し」に留まっている現状である¹。特に、古代寺院跡とその出土瓦の考古学的研究をもっと深める必要があると感じた。山代郷南新造院跡（四王寺跡）は、長い研究の歴史があるとともに、何よりも後に国造に就任する出雲臣弟山が建立した寺院であり（『出雲国風土記』意宇郡寺院条）、出雲の古代史に重要な位置を占める遺跡だと思う。そこで、この遺跡にあらためて注目してみたい。

2. 研究史と問題の所在

山代郷南新造院跡（四王寺跡）は、江戸時代前期の地誌類への登載²以後、300年以上の研究史をもつ遺跡である。明治期には、その字名「師王寺」から、『日本三代実録』貞觀9年（867）の「四天王像安置」の寺跡と推定された（柴田1907）³。『出雲国風土記』の新造院との対比研究は、江戸時代以降、出雲臣弟山建立新造院とされていたものが、昭和初期に日置君目烈建立新造院と考えられるようになり、さらに来美廢寺発見によって再び出雲臣弟山建立新造院と推定される、という変遷をたどった⁴。そして、1970年代、大草町六所神社周辺の発掘調査で出雲國府跡の所在が確認されたのにともない、これが確定した（野々村2002、花谷・高屋2012）。

その後、「八雲立つ風土記の丘」地内の遺跡保護を目的とする調査の一環として、南新造院跡（四王寺跡）の発掘調査が始まった。松江市による第4次調査（95年、曾田・金山1996）を除く4回がそれであり、第1～3次調査はそれぞれ概報が出されている（松本1985、宮沢ほか1988、足立・角田1994、以下、『報告IV』『報告V』『報告X』と略す）。また、第5次調査については林健亮氏の報告（林2011）がある。さらに、隣接地の寺の前遺跡と造瓦所の瓦窯跡（小無田Ⅱ遺跡）でも調査がおこなわれた（瀬古1995・1997）。

これらの発掘成果を受けた2005・06年度の八雲立つ風土記の丘復元模型（以下、「風土記模型」と略す）製作研究では、山代郷南新造院跡についても伽藍復元がおこなわれた（丹羽野ほか2009）。しかし、その復元案に関しては議論すべき問題点があると考える。

そこでまず、これまでの発掘成果によりながら、あらためてこの寺院の伽藍について考えてみたい。そして、出土瓦の型式的位置づけをおこなって、寺の造営過程を復元する。さらに、同範瓦を検討しながら出雲地域における古代寺院間の関連を考察して、山代郷南新造院跡の特質に触れたいと思う。



図 1 山代郷南新造院跡の位置

3. 発掘調査の概要

過去5回の発掘調査があった。次数ごとに示す(図3)。

第1次調査(1984年) 遺跡中心部での調査(I区)。地山を加工した土壇と掘立柱建物跡(寺院廃絶後のもの)を確認。多数の瓦と土器など出土。初めての寺院関連遺構(土壇)の発見(『報告IV』)。

第2次調査(1987年) 1次調査の西(II区)と東(IV~VI区), 遺跡西南部(III区)を調査。土壇を礎石建物基壇と推定し, 基壇規模を東西約23m, 南北約16mに復元。基壇周囲に瓦溜りを確認。瓦, 土器のほか, 塑像の螺髪が出土した(『報告V』)。

第3次調査(1993年) 基壇の東(VII区)と北側平坦面(VIII区)を調査。基壇東側で瓦溜りを確認。北側平坦面には明確な遺構なし(『報告X』)。

以上の3回の調査によって, 磚石建物の基壇跡が発見されたことは大きな成果である。この基壇の北側には一段高い平坦面があり, ここも伽藍地に含まれると推定されたが, 第3次調査(第VIII調査区)では, 明確な遺構がなかった。

第4次調査(1995年) 遺跡の西側での水路改修にともなう調査。瓦などが出土したが遺構は確認されなかつた(曾田・金山1996)。

第5次調査(2009年) 建物基壇の北側平坦面での確認調査。遺構なし(林2011)。

これらの調査で出土した瓦類については, 近藤正氏の分類(近藤1968)を基礎に『報告IV』で型式分類がなされ, 『報告V』において一部改訂と一覧が提示された⁵。その後の調査および瓦窯跡の報告(瀬古1997)も基本的にはこれに従う。採集資料には, 軒丸瓦Ⅲ類(山代郷北新造院跡軒丸瓦Ⅲ類と同范)と軒丸瓦Ⅳ類(北新造院跡軒丸瓦Ⅴ類と同范), 軒平瓦Ⅴ類(出雲国分寺跡軒平瓦1型式と同范)がある(花谷・高屋2012, 22頁)が, これらは発掘調査では出土し

ないので, 今回の検討対象とはしない⁶。

山代郷南新造院跡の創建軒瓦は, 軒丸瓦Ⅰ類と軒平瓦Ⅰ類である。後補の軒瓦に, 軒丸瓦Ⅱ類と軒平瓦Ⅰ類・Ⅱ類がある。

山代郷南新造院跡の軒瓦の系譜については, 近藤氏が出雲国内における奈良時代初期の瓦当紋様を2系統に分類したうえで, その一つとして「教吳寺系」をあげ, 「教吳寺-来美廢寺-四王寺跡の関係」を強調された(近藤1968)。その後, 『報告V』では, 軒丸瓦Ⅱ類と軒平瓦Ⅱ類について, 造立者である出雲臣弟山の国造就任(天平18年(746))と関連付けた⁷。この軒瓦の製作開始年代はもう少し古いと考えるが(花谷・高屋2012), これは後に詳しく述べよう。

4. 山代郷南新造院跡の伽藍復元

(1) 「風土記模型」の伽藍

八雲立つ風土記の丘展示学習館のリニューアルに際して, 奈良時代の風土記の丘地内を再現した「風土記模型」が製作された。当然, 山代郷南新造院も再現の対象である。模型設計図(図2, 丹羽野ほか2009 76頁第59図)作成のポイントは次の3点であった。

ポイント1 基壇上の建物は「東西方向に長さのある建物」つまり講堂と推定。建物の規模は, 身舎が5×2間で, これに四面庇が付き, 建物全体では, 衍行7間×梁行4間と推定された。屋根は寄棟瓦葺。

ポイント2 「講堂」北側の平坦面はやや高いので「格式の高い金堂・塔」が建つ。そして, 金堂と塔の配置は「法起寺式」とする。金堂は重層, 塔は三重に復元された。

ポイント3 「講堂」の前面に広いスペースがある。經營に関わる施設などを配置する, として「政所」や「花畠」が配置された。

このほか, 「講堂」の東側には瓦葺建物3棟が配置される(丹羽野ほか2009, 73-76頁)⁸。

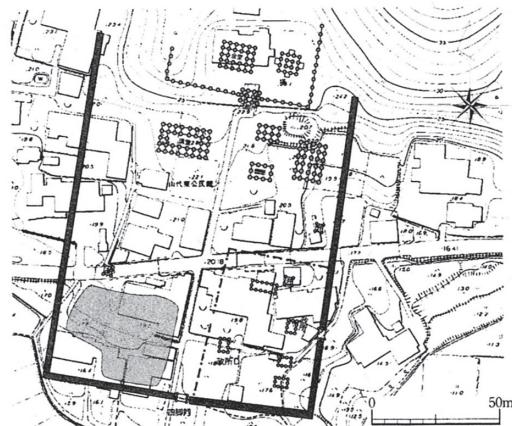


図2 「風土記模型」設計図

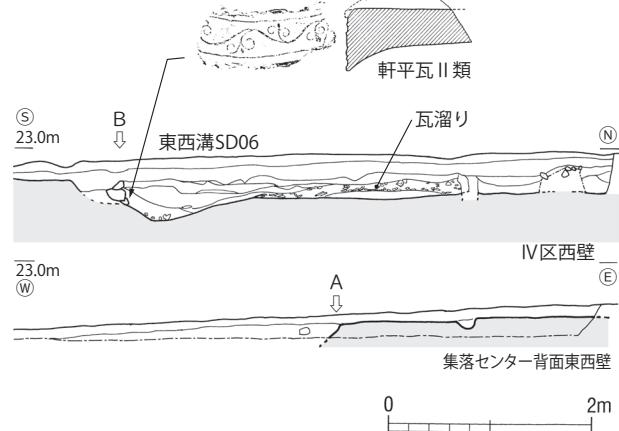


図4 建物基壇関係土層図 (1:150)

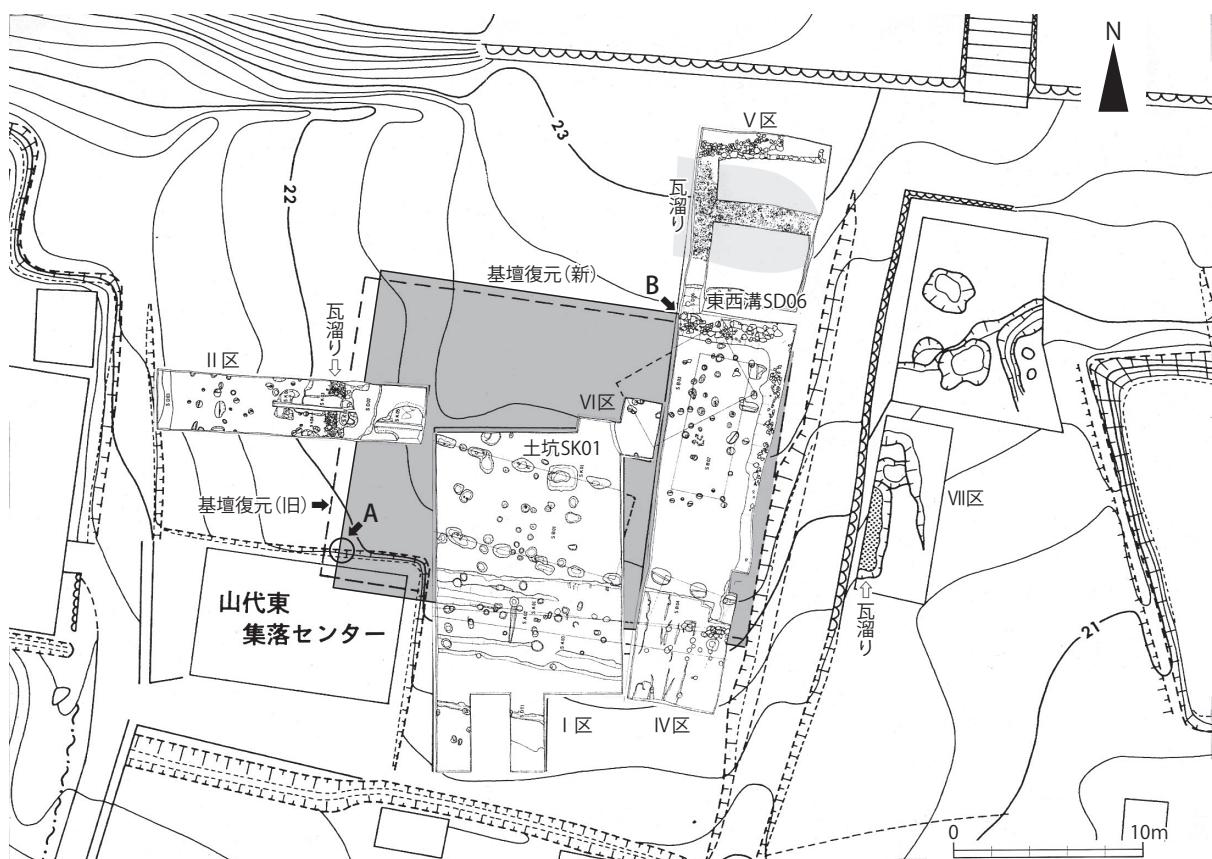


図3 建物基壇関連遺構図 (1:400)

また、図から算定すると、区画塀で囲まれた寺域は東西約103m×南北約150mのようである。おおむね、1町=360大尺=約108mが構想されているのだろうか。

さて、以上の「山代郷南新造院跡模型」だが、まず、基壇上の建物は講堂だろうか。模型設計図のように、7間×4間の建物をこの基壇上に建てるうとすると、その柱間はどうなるのだろう。

(2) 基壇建物は講堂か金堂か

『報告V』ではこの基壇の規模を、東西約23m×南北約16mとした。桁行方向の軒の出を6尺（約1.8m）と仮定した場合、柱間は9尺（約2.7m）等間であれば桁行総長は約18.9m、屋根の東西長は約22.5m。また、柱間を9.5尺（2.85m）等間とすれば、桁行総長約20mとなり屋根の東西長は約23.6mとなる。

一方、梁行については、軒の出を同じ6尺（1.8m）とすると、4間の梁行総長は約12.4m〔=基壇南北長16m - 1.8m × 2〕と計算されるので、身舎も庇も等間ならば柱間は約3.1m（10尺強）、庇の柱間を9尺（約2.7m）とすると身舎の柱間は約3.5m（11.5尺）が導き出される。いずれにしても、梁行の柱間が桁行に比べて長くなる。これは、異例である⁹。

この基壇建物の構造を、第3次調査の概報（『報告X』）では「5間×4間程度の礎石建物」と推定していた（同書21頁）。これが、「風土記模型」で桁行7間に変更となった経緯は明記されていない。そこで、まず、この基壇の規模について再検討しよう。

建物基壇に関わる調査遺構図を合成した（図3）。これと旧来の基壇復元線を対比すると、基壇の南側復元線は、東南隅に遺存していた乱石積み基壇外装の外側にあるが、北側復元線は基壇外装の内側あたりを走る。北側もやはり基壇外装の外側（図3-B）をとるべきであろう。また、西側の復元線はII区の瓦溜りと重なっている。II区の南側「集落センター」背面での断面調査では、国土座標Y = 84,304から西5mのところ、つまり、Y = 84,299に基壇西端がある（図3-A、図4下）。これはII区瓦溜りよりやや東に位置する。基壇東辺は従来の推定通り。

以上のように基壇四辺を推測すると、基壇規模は東西約22m×南北約17mとなる。基壇辺長の比率は1.29。これは、5間×4間の比率1.25に近く、7間×4間の比率1.75からは隔たる。ならば、基壇の建物は『報告X』で述べられたように、5間×4間の礎石建物と考えるべきである。そしてそれは金堂であろう¹⁰。

（3）建物基壇の北側に瓦葺建物はあるか

「風土記模型」の南新造院復元案がもつもう一つの特徴は、発掘された建物基壇の北側に「金堂・塔」が置かれた点にある。この配置の着想は、第2次調査V区の成果に基づくらしい。

この調査区では、建物基壇の北側、東西溝S D06をはさんで瓦溜りを発見した（図3）。地山上に瓦が堆積し（厚さ約30cm）、その広がりは南北約5m、東西約6m。調査区の西にも広がると推定されている。この瓦溜りから出土した軒瓦は、軒丸瓦がI類に限られ、軒丸瓦II類が1点も含まれなかった。軒平瓦については、『報告V』では、0類2点、I類1点、II類2点が図示されているが（28頁第24図、32頁）、『報告X』では、瓦溜りから軒平瓦II類は出土しなかったことになっている（22頁）。

そのためか、『報告X』では、V区の瓦溜りが建物基壇以前に形成されたと推測し、V区とVII区の瓦溜りは、「それぞれ異なった瓦を葺いた」、「廃絶された時期が異なる別々の建物に関わる遺構」とした。つまり、「まず8世紀前半代に軒丸瓦I類、軒平瓦0類を使って今ある基壇（I・IV区の建物基壇 筆者註）の北側に新造院が創建され、8世紀中頃以降に今の基壇に軒丸瓦II類、軒平瓦II類を使って新しい礎石建物が建立された」と結論づけた（『報告X』22頁）。おそらく、この見解が「風土記模型」制作時の伽藍配置案に大きな影響を与えたと思われる。

しかし、I・IV区の基壇造成が軒平瓦II類以後である、との推測には疑義を挟み込む余地がある（花谷・高屋2012）。年代推定の根拠は、基壇北側の乱石積み基壇化粧に軒平瓦II類が積み込まれていたこと（図4上）にあると思われるが、これを報告した『報告V』ではより慎重に、「基壇の石積施工時期については（中略）II類軒平瓦（中略）の制作時期をさかのぼらないと考えられる」（34頁）とする。わたしは、こちらの見解、つまり、基壇築成時期と基壇化粧の施工（あるいは修理）時期とを区別して考えるのが穩当で、『報告X』のように基壇の造成時期と直結させるのはやや性急と考える。

また、たとえ、V区瓦溜りの軒瓦型式とI・II・IV区の軒瓦型式が異なっていたとしても、それ

は瓦葺建物の違いには直結しない。V区は建物基壇の北側、つまり背面にあたるので、軒丸瓦II類と軒平瓦II類を使ってこの建物の屋根を葺き替えした場合、新調された瓦を建物の正面(南面)に使用し、当初の古い瓦を背面に回すことによくあることだ。それが瓦溜りごとの軒瓦の型式差に反映されたとみることは、十分に妥当性があると考える¹¹。

以上のように、V区で確認された建物基壇北側の瓦溜りは、これをその基壇上にあった瓦葺建物に関わるものと推測してなんら問題はない。さらに、その北方に瓦葺建物があったことを示唆しない。これは、V区および第5次調査の成果とも整合的である。

すなわち、建物基壇北方の一段高い平坦面に設定されたトレンチVIII区(第3次調査)では、明確な遺構が確認されないばかりか瓦もわずかしか出土しなかった。VIII区は、「風土記模型」と「塔」が建つすぐ東脇にあたる。また、第5次調査区は、模型で「金堂」が建つ位置の北に接したあたりである。調査の結果、「もし、古代寺院の主要部が位置していれば、多少の削平を受けたとしても、多量の瓦が出土するはずで、(中略)この平坦面上に古代寺院の主要部は及んでいなかったと考えられる」(林2011, 99頁)と結論付けた。この指摘は重要だ。

これまでの発掘調査を再検討すると、次のような結論が導き出せる。



図5 山代郷南新造院跡地割推定図 (1:2000, 方眼1マスは100大尺)

- ① 第1・2次調査で確認した建物基壇は瓦葺の金堂基壇である。
- ② 基壇の3方で見つかった瓦溜りは、いずれもこの建物に関係する可能性が高い。
- ③ 金堂の北側にある平坦面には寺院の主要部は及んでおらず、瓦葺建物は建たない。

では次に、これらを前提にして山代郷南新造院跡(四王寺跡)の寺域復元案を提示してみたい。

(4) 寺域の復元案 (図5)

すでに概報でも指摘されてきたとおり、発掘調査で確認された建物基壇は、その方位が、周辺の道路や畠の地割あるいは民家の建物方位とよく合致する。つまり、伽藍の方位は基壇の方位と一致する、とみてよい。また、前項での検討によって、この基壇は山代郷南新造院の金堂跡、つまり伽藍の中心となる建物と推考した。

そこで、まず、基壇の中心を南北に走る直線(図5, A-B)を伽藍の南北軸線と想定する。そしてこれを基準にして、天平尺100大尺(120小尺=35.52m)を一辺とする方眼を地形図に重ねてみよう。基壇の背後には茶臼山の山裾が迫っているが、この斜面裾のラインを西に延長すると道路に一致するから、これは造成の痕跡とみてよい。この斜面裾と基壇中心を通る東西軸線(図5, C-D)との距離は17~18mある。これは50大尺に近いから、基壇中心を通る東西線から南北それぞれ50大尺のところに方眼の東西軸線を設定する。基壇中心から南50大尺の位置には、県道建設以前に道があつたらしい(『報告V』41頁)。

このようにして、基壇中心から南50大尺を方眼心として、東西400大尺×南北400大尺の方眼(約142m四方)を重ねる(図5, E-F-G-H)。すると、字「内堀」と字「大畠」を中心にして、西側では字「師王寺」をカバーし、東で字「添廻」までの範囲となる。

西では、字「師王寺」と字「市場」の境にある道路の内側に方眼の西辺(図5, G-H)が

位置するが、このあたりで標高18・19・20mの等高線が南北方向に屈折するのとよく合致する。また、字「市場」に湾入する浅い谷部には池があるが(今は埋め立てられ住宅地となった)、この低地部は伽藍地に含まれない。西北隅の100大尺方眼とその東側の方眼は、矩形に加工された丘陵および丘陵裾の地形とよく合致している。

また、金堂基壇の北側平坦地の西裾と南北幅も方眼によく揃っている。東側では、字「内堀」と字「添廻」との境辺りに、山裾の標高19~25m等高線が20mほどの幅で凸字形に張り出した地形がある。この地形は、ちょうど方眼の東辺(図5, E-F)に沿うように見える。また、その内側には、標高17・18mの等高線が南北に走っている。そして、方眼の東南隅(図5, F)は、標高12~16m等高線がスロープ状に入り込んだ地形部分にほぼ一致するとともに、そこから西側には丘陵上に平坦地が連なり、方眼の南辺が位置する。

唯一、方眼の南西隅部(図5, G)が低地部と重なる。ここは松江市が寺の前遺跡として発掘調査し、寺域外と考えられた場所である(瀬古1995)。この一マスは寺域から除外するほうがよかろう。ちょうど、この部分で標高16mの等高線が北に屈曲する。

以上、金堂基壇を中心部のやや北に配置した、東西南北400大尺、つまり約140m四方、面積約19,000平方メートルの寺域を推定復元した¹²。堂塔の配置は、金堂以外に手掛りがないが、伽藍の中心は金堂を含む100大尺6方眼(東西2方眼×南北3方眼)と考える。この東西約70m・南北約105mの区画に、その他の堂塔が配置されたと推測する。そして、その外側の東西に政所や厨などの経営部署や、花園院・薬院のような附属部署が存在したと推測できるだろう。

5. 軒瓦について

(1) 軒瓦の型式分類

山代郷南新造院跡から出土する軒瓦は、近藤正氏の分類をもとに『報告IV』で型式設定され、『報告V』で一部に変更が加えられた。基本的には、この『報告V』の型式分類に基づいて記述する¹³。この他に、「平塚運一コレクション」として古代出雲歴史博物館に所蔵される資料がある¹⁴。そのなかに素弁8弁蓮華紋軒丸瓦1点がある。発掘調査では出土していないが、軒丸瓦I類と同紋であり、かつ、ほかに同范例がないことから、南新造院跡の軒丸瓦と認めた。これまでのI類を「I類A」、「平塚運一コレクション」資料を「I類B」と型式設定する。また、軒丸瓦II類は、中房蓮子の彫り直しによってII類aとII類bとに細別した（花谷・高屋2012）。

軒丸瓦

軒丸瓦I類A 珠紋・面違い鋸歯紋縁の单弁12弁蓮華紋軒丸瓦（図6-1）。やや高い中房に1+6の蓮子をおく。蓮弁は細身の素弁で、ゆるい照りむくりがある。蓮弁と同形の間弁を配置した、いわゆる「のぞき花弁」の間弁である。内区と外区内縁とは、圈線に加えて、紋様の地がゆるい斜縁となり段差でも区画されるのが特徴。外区内縁の珠紋も、緩く内に傾斜する面に配置されている。外縁の面違い鋸歯紋は左行である¹⁵。瓦当径は約16センチ。

[軒瓦分類表]

軒丸瓦型式	蓮弁	間弁	中房・蓮子	外区内縁	外区外縁
I類A	单弁12弁	のぞき花弁12	凸・1+6	珠紋24	面違鋸歯紋28?
I類B	素弁8弁	のぞき花弁8	凸・1+4	珠紋16?	素紋
II類(a・b)	素弁4弁	のぞき花弁4	凸・1+4	素紋	素紋

軒平瓦型式	中心飾り	唐草紋	外区(上+下)	脇区
0類	吊字形	2回反転均整忍冬唐草	珠紋(17+13?)	珠紋3
I類	蕾形	内向3回反転唐草	珠紋(9+9)	珠紋2
II類	三葉形	内向3回反転唐草	素紋	素紋

軒丸瓦I類B 珠紋・素紋縁の单弁8弁蓮華紋軒丸瓦（図6-2）。蓮弁は、形や配置にややらつきがある。間弁はやはり「のぞき花弁」。外区内縁の珠紋は疎らである。珠紋数は16個と推定される。外縁は丸みのある低い直立縁。丸瓦の接合手法は不詳だが、接合位置は高い。瓦当径約14センチで、やや小ぶりである。

軒丸瓦II類 素紋縁の单弁4弁蓮華紋軒丸瓦（図6-3・4）。間弁はI類A・Bと同じく「のぞき花弁」。内区と外区を圈線で区分するが、外区と外縁にはともに紋様はない。中房蓮子の彫り直しにより、II類aとII類bに細別できる。また、范型の傷と割れの進みぐあいで段階設定することができ、范割れ前と范割れ1段階がII類a、范割れ2・3段階がII類bにあたる（花谷・高屋2012）。

軒平瓦

軒平瓦0類 「吊」字形をした中心飾りから左右に2回反転する均整忍冬唐草紋軒平瓦（図6-5）。「平塚運一コレクション」（資料番号：寄贈1175）によって右半部の紋様と上外区珠文数を復元できた。中心飾は変形の忍冬紋か。単位紋は半型の忍冬紋である。上下外区と脇区は斜めの界線で区画され、各区に珠紋が並ぶ。珠文数は、上外区が17個、下外区が13個（推定）、脇区は3個である。頸は段頸。凸面調整は、タテ方向のヘラケズリのうち頸面と頸段部付近をナデ、凹面は瓦当側半分ほどがヨコ方向のヘラケズリ調整。模骨痕や粘土板の合せ目の存否は

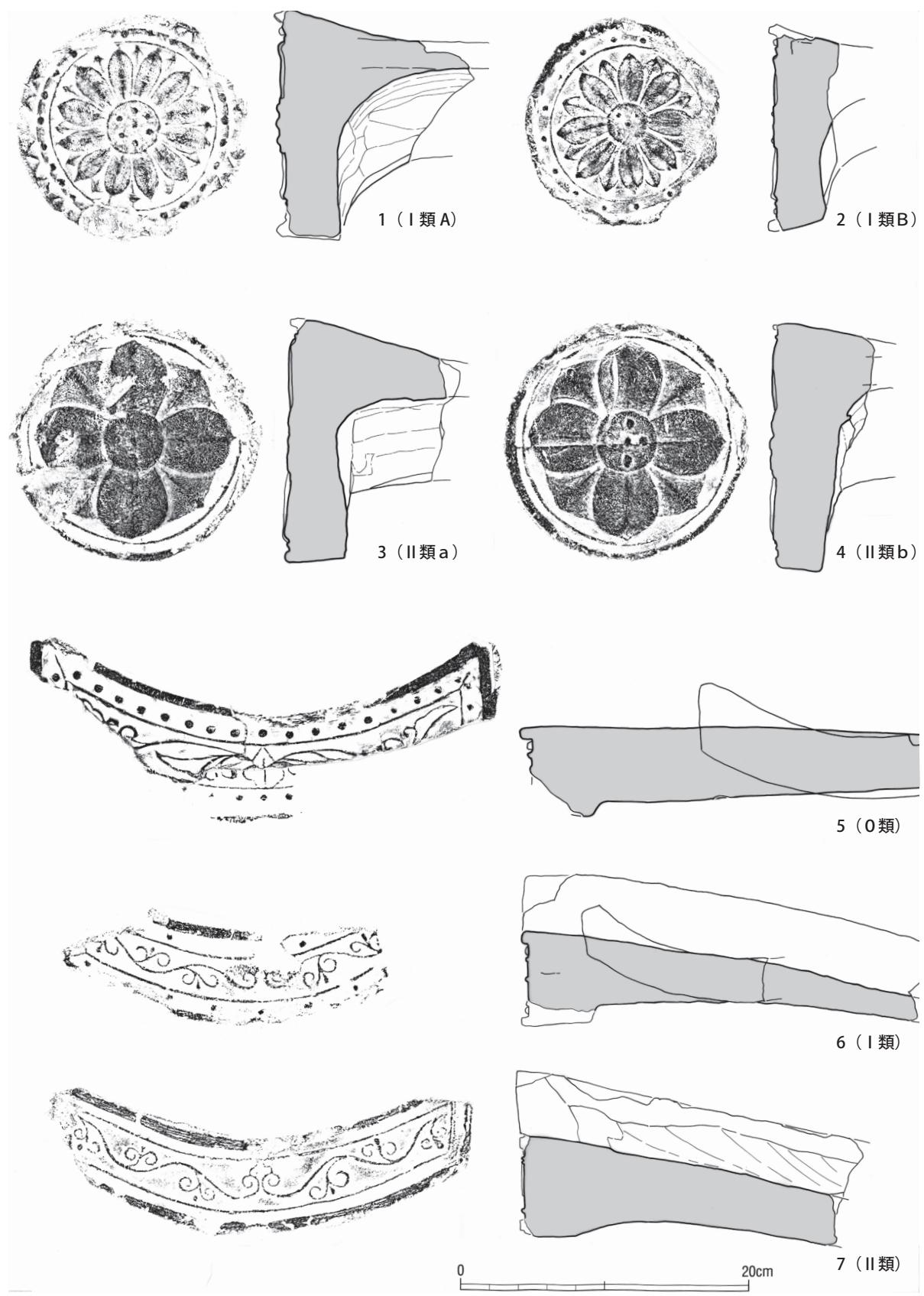


図6 軒瓦一覧 (1:4)

よくわからない。

軒平瓦 I類 Δ 状の蓄形を中心飾りとし、左右の上隅から中心飾に向かって派生する3回反転唐草紋軒平瓦（図6-6）。単位紋は3葉構成である。上下外区と脇区の珠紋は、斜めの界線で区画される。珠文数は上下外区が9個、脇区が2個である。顎は段顎。凸面調整は、ヨコ方向のナデのちタテヘラケズリ、凹面の調整はヨコ方向のナデあるいはヘラケズリで、布圧痕をほとんどとどめない。

軒平瓦 II類 三葉形の中心飾に向かって左右から派生する3回反転均整唐草紋軒平瓦（図6-7）。唐草の単位紋は3葉構成で、I類と近似している。顎は、曲線顎と直線顎がある¹⁶。

同範関係 以上の軒丸瓦、軒平瓦のうち、軒丸瓦II類は、松江市中竹矢遺跡（II類a「範割れ1段階」、広江ほか1983 325頁第110図201・図版118）、松江市西長江町常楽寺瓦窯跡（『報告IV』第18図1）のほか、出雲市東林木町大寺谷遺跡（II類b「範割れ2段階」花谷・高屋2012）からも同範品が出土している。

軒平瓦O類は、山代郷南新造院瓦窯跡（小無田II遺跡）2号窯跡から同範品が出土した（瀬古1997 第11図19・20、図版6）。また、軒平瓦I類は、安来市野方町野方廃寺軒平瓦III型式（永見・上原1985）および山代郷北新造院跡（来美廃寺）軒平瓦II類（柳浦2002）と同範である。さらに、軒平瓦II類は、山代郷北新造院跡軒平瓦III類（柳浦2002）と同範、かつ、西長江町常楽寺瓦窯跡（『報告IV』第18図2）および山代郷南新造院瓦窯跡（2号窯跡）からも同範品が出土している（瀬古1997 第11図21-24、図版6）。

（2）軒瓦の組み合わせとその年代

山代郷南新造院跡の軒瓦は基本的に次の3組が想定できる。

軒丸瓦I類A - 軒平瓦O類、

軒丸瓦I類B - 軒平瓦I類、

軒丸瓦II類 - 軒平瓦II類。

南新造院跡の軒丸瓦3種の共通点は、間弁が蓮弁と同じ形をした「のぞき花弁」という点にある。「のぞき花弁」は飛鳥時代の金銅仏蓮華座にいくつもの例があるほか、素弁蓮華紋軒丸瓦にも大和・中宮寺跡の素弁8弁蓮華紋軒丸瓦に同様の例がある（猪熊ほか1991 24頁96、荒木編2013 210頁図147-23など）。この中宮寺跡の軒丸瓦は7世紀前半の例であって、南新造院跡の諸例とは直接的には関連しないと思うが、同じような表現手法がすでに国内で確認できることは留意しておいてよいだろう。

そして、山代郷南新造院跡の軒丸瓦3種は、蓮弁数の減少と外区紋様の簡略化からみて、I類A⇒I類B⇒II類、と変遷したことは明らかであろう。軒平瓦は、O類とI・II類とで内区紋様に大きな違いはあるが、珠文数の多少と有無、外区区画手法の違い、さらには顎の形状によって、O類⇒I類⇒II類、との変遷を想定できる。

よって、3組の軒瓦は、先に列記した順序に編年できるだろう。ただし、軒丸瓦I類Bは採集資料1点のみであり、出土量からは軒平瓦I類とはつり合わない。よって、ここでは軒瓦の組み合わせとしては、

① 軒丸瓦I類A・B - 軒平瓦O・I類

② 軒丸瓦II類 - 軒平瓦II類

の2組として行論を進める。軒瓦①の組み合わせが創建軒瓦、つまり金堂創建軒瓦ということになる。

次に、これら軒瓦の年代を検討する。

軒瓦②の年代については、軒平瓦II類が一枚作り軒平瓦だということと、顎形態を奈良・平城宮京の軒平瓦と比較検討して、その製作開始年代を730年代から740年代初めと推定した。当然、軒瓦①の年代は、これ以前である。

軒丸瓦I類Aは、外縁の紋様こそ面違い鋸歯紋ではあるが、中房蓮子が一重であること、そして、軒平瓦O類が均整唐草紋であることから、

ともに奈良時代的な紋様を備えた軒瓦といえる。さかのぼっても、文武朝大官大寺の創建軒瓦（軒丸瓦6231－軒平瓦6661）である。

次に、製作技法から検討してみよう。

軒平瓦0類は、凹凸面ともナデ調整やヘラケズリ調整がていねいなため、模骨の側板痕や粘土板合せ目、布袋の綴じ合わせ痕を確認できない。山代郷南新造院瓦窯跡（小無田II遺跡）の同范資料も、凹面の調整がていねいなため、布圧痕がわずかの残る程度で、模骨痕を確認できる資料はない。平瓦部の厚さが4～5cmもあり、桶巻き四枚作りとすると粘土円筒は相当な重量になると思われる。

軒平瓦I類は、山代郷南新造院跡出土資料をみると、桶巻作りと判断できる資料はない。軒平瓦I類と同范の山代郷北新造院跡の資料（北新造院跡軒平瓦II類）をみると、北新造院跡と同じように上外区の珠紋が表出されている資料と、瓦当厚が小さいために上外区が表出されていない資料がある（柳浦2002、第27図2・4～6および第28図1・2）。これらの資料には、凹面に模骨痕を確認できるものがある（第27図6や第28図1・2）¹⁷。なお、上外区が表出されない資料の多くは、頸の段部が浅く、横方向のナデで段を示すものもある。これら山代郷北新造院跡の同范資料は、粘土板桶巻作り軒平瓦とみてよい。

このように、同范の南新造院跡I類軒平瓦と北新造院跡II類軒平瓦とを比較すると、後者は段部の成形手法が簡略化され、しかも凹面調整が粗雑化している。その後者が桶巻作り技法で作られているから、前者、つまり南新造院跡I類軒平瓦も桶巻作り技法である可能性はある。さらに、南新造院跡0類軒平瓦も桶巻作り技法による可能性を想定しうる。

しかしながら、南新造院所用の瓦窯跡である小無田II遺跡に、桶巻作り平瓦はごくわずかしかない。1号窯跡からは模骨痕と布綴じ痕跡を

残す1点と模骨痕を残す1点、2号窯跡からは模骨痕を残す1点を確認できただけだった¹⁸。いずれも凸面にタテ縄叩き痕を残している。小無田II遺跡の2号窯跡からは2点の南新造院跡0類軒平瓦が出土しているが、これが桶巻作り技法だとすると、それに対応するだけの桶巻作り平瓦の数量とはいえない。南新造院跡の発掘調査概報（『報告IV・V・X』）にも、桶巻作り平瓦はまったく掲載されていないので、南新造院跡では桶巻作り平瓦は例外的な存在だったと判断できるだろう。よって、南新造院跡の軒平瓦0類とI類の製作技法については、その判別を今後のさらなる資料調査に期すこととし、現段階では、山代郷南新造院は、平瓦一枚作り技法の導入以降に創建されたと考えておく。

出雲での平瓦一枚作り技法の導入時期は、これを確定させる資料はない。平城宮・京軒瓦編年（毛利光・花谷1991）によれば、段頸をもつ一枚作り軒平瓦は、第I期後半（第I-2期、靈龜2年（716）～養老2年（718）頃）に登場し、第II期後半（第II-1期、養老5年（721）～天平初年（729）頃）に主流となる。これに準ずれば、山代郷南新造院跡の創建時期として、720年代という年代を提示できるだろう。

（3）ほかの寺院跡などとの関係

生産遺跡である山代郷南新造院瓦窯跡（小無田II遺跡）と松江市常楽寺瓦窯跡を除くと、意宇郡内の2つの寺院跡（松江市山代郷北新造院跡と安来市野方廃寺）と出雲郡内の寺院推定地（出雲市大寺谷遺跡）と軒瓦の同范関係がある。しかし、いずれも軒瓦がセットで同范関係にあるわけではない。近傍の山代郷北新造院跡とは、軒平瓦の2型式が同范関係にあり、軒平瓦I類は南新造院跡への供給が先行するようと思われる。軒平瓦II類はどちらが古いか不明だが、量的には南新造院跡が多く、こちらが先行するのだろう。

同范関係の特徴の一つは、創建軒瓦に同范例

が認められることである。これは、出雲国内の寺院跡に共通する特徴ともいえる。

もう一つの特徴は、同範関係と造営氏族が結びつかないことである。山代郷北新造院は日置君目烈の造営、野方廃寺は上腹首押猪の祖父・教昊僧造営の教昊寺推定地。ともに、出雲臣弟山とは別氏族である。その一方で、楯縫郡内には同族の出雲臣大田（同郡大領）が造った新造院があるが、その遺跡・出雲市西西郷廃寺（原ほか1998）とは同範関係をもたない。

さらに、出雲国分寺跡や国分尼寺跡の同範瓦も、発掘資料にはない。この点は、山代郷北新造院跡でも同じであり、各氏族が運営する寺院を修造管理するにあたって、「出雲国」はほとんど関与していないようである。

6. おわりに

山代郷南新造院は、出雲臣弟山が創建した寺院だ。その創建は『出雲國風土記』勘録のおよそ10年前、養老末年から神龜年間あたりのことだった。寺域は、東西南北400大尺（約140m四方）、面積約19,000平方メートルと推定され、その中心やや北に金堂がそびえたっていた。堂塔の配置は、金堂以外に手掛けがないが、伽藍の中心は金堂を含む100大尺方眼6個（東西200大尺×南北300大尺）と考える。この東西約70m×南北約105mの区画に、その他の主要堂塔も配置さ

【註】

¹ この点については、すでに野々村安浩氏が山代郷北新造院跡（来美廃寺）の発掘調査成果を受けて「[新造院]研究をめぐり、この調査発掘成果をふまえて、新たにいくつかの課題の検討が必要になってきたと思う。」と述べられている（野々村2002、106頁）。まさにその通りだと思う。

² 岸崎左久次時照『出雲風土記抄』（桑原家本、天和3年（1683））には、「新造院一所在山代郷中郡家西北二里建立嚴堂〔住僧一軀〕 飯石郡少領出雲臣弟山之所造也 鈔曰 西北二里今十二町 蓋聞有山代村于四王寺今者無之 不知抑是乎不」

れたと推測した。これを仮に「伽藍域」とすると、その東西と南側の外周、約35m幅の一帯に、経営部署や附属部署が配置されたであろう。

「伽藍域」の規模は、山代郷北新造院跡の礎石建ち建物4棟と総柱建物が並ぶ範囲とほぼ同じであり、伯耆・大御堂廃寺（倉吉市）の東西90m×南北135mの「伽藍域」よりは一回り小さい（眞田ほか2001）。しかしながら、中心に建つ金堂は、その基壇規模が東西約22m×南北約17mあり、出雲国分寺を除けば、出雲国内最大の規模。まさに出雲国造となるべき人物が造った寺にふさわしい、といえよう。金堂には、おそらく丈六仏が安置されていたことだろう¹⁹。

南新造院跡のすぐ南には山陰道正西道が走っていた。出雲国府から西に向かって低地を進むと、道は台地（通称「団原」）にかかる。台地に上がれば、その北側には、風に揺れる茅原に覆われた意宇郡神名樋野を背景としてこの山代郷南新造院がその威容をみせていたはずだ。

国造職を担う出雲臣家が仏教伽藍を造営したことは、山陰道の中でも寺院建立が遅れていた出雲国の宗教事情に大きな影響力をもったにちがいない。のちのことだが、中世期の出雲は、杵築大社と鰐淵寺が並び立ち、「神仏隔離原則に基づく神仏習合」（井上寛司氏）という特殊な宗教世界を形成した。その萌芽がここ山代郷南新造院の出現にあったとすれば、この遺跡の重要性はもっと顕彰されるべきと信ずる。

黒沢長尚『雲陽誌』（享保2年（1717））には、「四王寺【風土記】に曰 山代郷中新造院一所、飯石郡少領出雲臣造所とあり、是なるへし、今は寺跡ばかりなり。」

岸崎は、四王寺跡を出雲臣弟山造立寺院にあてるにやや懐疑的だが、黒澤は肯定的である。

³ 出雲大社の神官であった廣瀬鎌之助氏による論考もある（廣瀬1919）。

⁴ 『報告V』表1および、野々村氏作製の「新造院比定寺院跡一覧表」参照（野々村2002、105頁）。野々村氏は、朝山皓氏以後、池田満雄氏だけが日置君目

烈建立新造院を四王寺跡にあて、出雲臣弟山建立新造院については「来美廃寺説紹介」とされるが、これは正確ではない。池田氏は『新修島根県史通史篇1』で、「四王寺廃寺」について「山代郷内の一つの新造院にあたる」説（旧県史など）をあげるにとどまる。そして、この遺跡の東150メートルにある「山代南廃寺」を紹介して、これを出雲臣弟山の建立したものと推定する。また、来美廃寺については、ほかの論者と同様に建立者を日置君目烈とする（池田1968, 242—244頁）。

⁵ 『報告V』表7軒瓦分類表に示された軒平瓦I類の拓影の内区紋様は、軒平瓦II類のものである。

⁶ 「平塚運一古代瓦コレクション」（県立古代出雲歴史博物館所蔵）には、別型式の軒丸瓦があるが、これについては後に詳しく述べる。

⁷ この軒瓦を前島巳基氏は「四王寺跡系軒瓦」と様式設定している（前島1986）。だが、その内容と系譜関係には疑問点も多い。

⁸ 東西棟建物2棟は、2×3間の規模で、北側が総柱建物、南側が側柱建物である。それらの東にある南北棟建物1棟は、2×3間に四面庇が付く総柱建物である。「寺院経営に関わる施設群」とされている。

⁹ 近くにある出雲国分寺の堂塔復元案では、身舎の桁行・梁行柱間はほぼ同じである。

石田茂作氏による復元案（金堂と「僧坊」は1次調査後の案「1次案」と2次調査の成果による案「2次案」がある）を示しておく。

金堂1次案；桁行総長92尺（7間、12+13.5+13.5+14+13.5+13.5+12尺）、梁行総長51尺（4間、12+13.5+13.5+12尺）

金堂2次案；桁行総長92尺（7間、身舎14尺等間・庇11尺）、梁行総長50尺（4間、身舎14尺等間・庇11尺）

講堂；桁行総長77尺（7間、10+10+12+13+12+10+10尺）、梁行総長44尺（4間、身舎12尺等間・庇10尺）

「僧坊」1次案；桁行総長90尺（9間、10尺等間）、梁行総長28尺（3間）

「僧坊」2次案；桁行総長90尺（9間、10尺等間）、梁行総長36尺（4間、身舎10尺等間・庇8尺）

前島巳基氏や山本清氏も、これを踏襲している。

¹⁰ 金堂とした場合、出雲国分寺（108尺×67尺（または64尺））には及ばないとはいえ、その基壇規模は相当に大きい。出雲では、近傍の山代郷北新造院跡金堂（第2基壇）が、東西12.9m（43尺）、南北10.8m（36尺）の規模と判明している。これに比較すると、一辺長で1.6～1.7倍の規模で格段に大きく、大和・飛鳥寺中金堂（東西21.2m×南北17.6m）や大和・法隆寺金堂（東西22.4m×南北19.1m）の基壇規模に匹敵する。

¹¹ さらに、V区瓦溜りの堆積状況を確認すると（『報告V』第13・22図、図版7上），調査区の北側から流れこんだ状況はみてとれないと、南側に大型の破片が堆積しているさまがうかがえる（図4上）。なにより、『報告V』には、この瓦溜りが北方からの流れ込み堆積である、との記述はまったくない。

¹² 山陰の古代寺院で設計地割が推定復元された例に、伯耆・大御堂廃寺（倉吉市）がある。大御堂廃寺では、堂塔の中心軸線と東限築地堀との距離が45mであったことから、一辺45mの方眼を基本単位と想定し、東西3単位×南北4単位の東西135m×南北180mの寺域を推定復元している（真田ほか2001）。45mは、およそ、150小尺=125大尺に相当する。後述するように、金堂・塔・講堂や僧坊が配置される「伽藍域」はその東南部の方眼6単位、東西90m×南北135mとされている（真田ほか2001）。

¹³ 発掘調査で出土しなかった型式（軒丸瓦III類・IV類、軒平瓦IV類）は今回、検討対象からはずす。

¹⁴ この瓦の存在は、内田律雄氏に教えていただいた。平塚運一古代瓦コレクション資料には、「島根県四王寺」出土とされた瓦が12点ある（東山ほか2011, 84頁）。その内訳は、軒丸瓦4点（購入4・購入58=II型式、購入94=I型式B、購入97=I型式A）、軒平瓦6点（寄贈734=I型式、寄贈1175=0型式、寄贈1332・寄贈2055=II型式、寄贈2346=0型式か？、寄贈1610=軒平瓦狭端部）、刻印平瓦1点（寄贈2126）、熨斗瓦1点（寄贈1300）である。（東山ほか2011）第4表（84頁）とは、瓦種別の異なるものがある。

¹⁵ 『報告X』には、第VII調査区瓦溜から出土した軒丸瓦の中に南新造院跡I類に「極めて近い形態の瓦当であるが、外縁が素縁の直立縁となっているのが大きな特徴」の1点があると報告されている（同書13頁・第12図1）。しかし、本資料には外縁に面違ひ鋸歯紋があり、珠紋帯内外の区画手法や間弁の形状からもI類Aの同范品とみてよい。

¹⁶ 山代郷北新造院跡（来美廃寺）には、段頸の資料がある。

¹⁷ くわえて、これらの狭端部の資料がある。（林2007, 第35図2）は、「平瓦IIb-2」「凸面縄目をナデ消す、軒平瓦か？」とされたもの。凸面タテ縄叩きを幅広のタテヘラケズリ（狭端に向く）で調整。側面は垂直方向。凹面には模骨痕がある。また、「平瓦IIIc」「凸面ナデ調整でタタキを残さない」と報告された（林2007, 第37図6）は、凸面全面に幅広のタテヘラケズリ調整があって、叩き目は残らない。凹面には模骨痕がある。

この2点は、胎土・焼成がよく似ており、その特徴は北新造院跡軒平瓦II類と共通するので、その平

瓦部狭端の破片とみてよい。

¹⁸ 松江市教委・川上昭一さんと実見した。

¹⁹ 第2次調査IV区の建物基壇北東隅から、塑像の螺髪1点が出土した。これについて、的野克己氏の教示として「塑像の大きさは立像であれば約120cm、座像であれば、その1/2の高さになるとのことであった。」と記されている（『報告V』33頁）。120cmは天平尺で約4尺だから、半丈六のさらに半分の大きさの如来像ということになる。

亀田修一・亀田菜穂子氏は、本例を「出雲四王寺跡例」として取り上げ、「円錐形C類」とした。「側面が直線的な面と段で構成されているもの」であり、本例のほかに尾張清林寺遺跡例がある。日本での類例は少ないものの、韓国では、百濟恩山金剛寺跡、益山弥勒寺跡、統一新羅時代の陝川竹竹里廢寺があり、「系譜などを考える上で参考になるかもしれない。」とした（亀田・亀田1988）。

仏像の像高と螺髪の大きさとの相関関係からみると、山代郷南新造院跡出土例は、三河琴字山遺跡例とともに「一般的な形の塑像螺髪の中では最も小さい」一群に属す。これらは「等身大ならば一般的な部位、半丈六ならば一般的な部位でも可能ではあるが、耳や襟足付近のより小さいものである可能性も考えられる。」と結論付けられている。

さて、出雲国内では山代郷北新造院跡からも塑像片が出土している。主に、第2基壇とよばれる金堂跡から出土したものである。この堂宇は出土瓦などの分析から、この寺跡の創建当初に建立されたものと推定されている。この塑像片について報告書（柳

浦2002）は、螺髪を「径2cm、高さ1.6cm」とし、亀田論文を引用して「この程度の大きさの螺髪は半丈六仏級以上に多いという。」とする。しかし、南新造院跡から出土した螺髪と比較すると北新造院跡のものが明らかに大型であり、しかも、下部を大きく欠損するから、完全であれば底径2cm以上、高さも3cmをこえる大きさであることは間違いない。とすれば、それは丈六仏の螺髪とみてよかろう。北新造院跡金堂の本尊が丈六仏であったならば、基壇規模で勝る南新造院跡金堂の塑像仏像が半丈六像か等身大の仏像とした場合、それは本尊としては小さいというべきである。建物規模から考えて、やはり丈六仏が本尊にはふさわしい。

南新造院跡の金堂基壇の中央にある土坑SK01（図3）は、この本尊の据え付けに関わる遺構ではないか。土坑SK01は、東西1.56m、南北1.3mの長方形の穴で、深さは75cmある。出土遺物に青磁や石硯を含むので、室町時代に攪乱されたと思われるが、その位置は今回復元しなおした基壇の中心から0.5m南にあり、四辺の方向は基壇とほぼ一致する。これが基壇にともなう遺構である可能性は高いだろう。山代郷北新造院跡（来美廢寺）でも、本尊位置の直下には深さ60cm以上の土坑が掘られているから（柳浦2002、第60図）、これと同様の本尊安置方法が推測される。

山代郷南新造院跡の基壇建物が、中央に本尊を安置する形態の建物であったとすれば、これもまた金堂と考える有力な証左となりうる。

【参考文献】

- 朝山 畏 1953 「出雲國風土記における地理上の諸問題」 平泉澄監修『出雲國風土記の研究』 出雲大社・皇學館大學出版部, 449-502頁。
- 足立克己・角田徳幸 1994 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告X 一島根県松江市山代町所在・山代郷南新造院（四王寺）跡一』 島根県教育委員会。
- 荒木浩司編 2013 『史跡中宮寺跡発掘調査報告書』 斑鳩町文化財調査報告 第11集, 斑鳩町教育委員会。
- 池田満雄 1968 「仏教」『新修 島根県史通史篇1 考古・古代・中世・近世』 島根県, 240-260頁。
- 猪熊兼勝ほか 1991 『飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察』 飛鳥資料館。
- 沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉 2005 『出雲國風土記』 山川出版。
- 加藤義成 1962 『修訂 出雲國風土記参究』 今井書店。
- 亀田修一・亀田菜穂子 1998 「塑像螺髪に関する覚書」『網干善教先生古希記念考古学論集』 下巻, 網干善教先生古希記念会, 1181-1205頁。
- 後藤藏四郎 1926 『出雲國風土記考證』 大岡山書店。
- 近藤 正 1968 「『出雲國風土記』所載の新造院とその造立者」『日本歴史考古学論叢』 2, 雄山閣出版（のち『山陰古代文化の研究』近藤正遺稿集刊行会, 1978年, 85-117頁に再録）。
- 眞田廣幸ほか 2001 『史跡大御堂廢寺跡発掘調査報告書』 倉吉市文化財調査報告書 第107集, 倉吉市教育委員会。
- 柴田常惠 1907 「四王寺」『宗教界』 第3卷第1号,

- 瀬古諒子 1995『寺の前遺跡発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書 第62集, 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団。
- 瀬古諒子 1997『小無田II遺跡発掘調査概報』松江市文化財調査報告書 第75集, 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団。
- 曾田辰雄・金山正樹 1996『四王寺跡発掘調査報告書 一団原排水路改良工事に伴う一』松江市文化財調査報告書 第69集, 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団。
- 高嶋弘志 1995「出雲国造の成立と展開」『出雲世界と古代の山陰』古代王権と交流7, 名著出版, 159–189頁。
- 地方史研究所編 1963『出雲・隱岐』。
- 永見英・上原真人 1985『教吳寺 1』安来市教育委員会。
- 丹羽野裕ほか 2009『出雲国府周辺の復元研究 –古代八雲立つ風土記の丘復元の記録一』島根県古代文化センター調査研究報告書43, 島根県古代文化センター。
- 野津左馬之助 1926『島根縣史 第五篇 國司政治時代』島根縣内務部島根縣史編纂掛。
- 野々村安浩 2002「『出雲國風土記』所載の「新造院」をめぐって」『來美廢寺』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書13, 島根県教育委員会, 101–106頁。
- 花谷 浩・高屋茂男 2012「出雲国意宇郡山代郷南新造院跡と出雲郡大寺谷遺跡の同範瓦について」『しまねミュージアム協議会共同研究紀要』第2号, 19–37頁。
- 林 健亮 2007『山代郷北新造院跡』史跡出雲国山代郷遺跡群北新造院跡（來美廢寺）発掘調査報告書, 島根県教育委員会。
- 林 健亮 2011「附編 山代郷南新造院跡」『史跡出雲国府跡 一7一』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書20, 島根県教育委員会, 95–100頁。
- 原 俊二・西尾克己・上原真人 1998『山根垣古墳・西西郷廢寺』平田市埋蔵文化財調査報告書第6集, 平田市教育委員会。
- 東山信治ほか 2011『平塚運一古代瓦コレクション資料集（2）』武藏国分寺関連字瓦・鎧瓦補遺・平塚運一コレクション資料目録, 島根県古代文化センター調査研究報告書44, 島根県教育庁古代文化センター・埋蔵文化財調査センター。
- 広江耕史・内田律雄・宮沢明久 1983「中竹矢遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書－IV－』建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会, 199–345頁。
- 廣瀬鎌之助 1919「出雲國四王寺考」『山陰珠璣』第5号, 山陰珠璣社, 13–16頁。
- 前島巳基 1986「山陰における初期造寺活動の一側面 –軒瓦の様相を中心にして」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会, 471–500頁。
- 松本岩雄 1985『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告IV 一島根県松江市山代町所在・四王寺跡一』島根県教育委員会。
- 三舟隆之 1995「上淀廢寺と山陰の古代寺院」『出雲世界と古代の山陰』古代王権と交流7, 名著出版, 119–157頁。
- 宮沢明久・松本岩雄・平野芳英・三宅博士 1988『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告V 一島根県松江市山代町所在・四王寺跡一』島根県教育委員会。
- 毛利光俊彦・花谷浩 1991「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮発掘調査報告XIII』奈良国立文化財研究所, 270–276頁。
- 柳浦俊一 2002『來美廢寺』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書13, 島根県教育委員会。
- 山本 清 1953「遺跡の示す古代出雲の様相」平泉澄監修『出雲國風土記の研究』出雲大社・皇學館大學出版部, 413–447頁。

【あとがき】

本稿を作成するにあたり、資料調査等で下記の方々と諸機関のお世話になった。記して謝意を表します。敬称略。

内田律雄、川上昭一、高屋茂男、中川 寧、東森 晋。

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター、島根県古代文化センター、島根県立古代出雲歴史博物館、松江市教育委員会、八雲立つ風土記の丘展示学習館。